

子どもたちへの動物愛護教育の検討について

動物愛護センター ○高橋 葵 松澤淑美 坂本 淳 小木曾悦人

1 はじめに

動物愛護センターの事業として、子どもに対する動物愛護の啓発があり、主に動物ふれあい教室、動物ふれあい出前教室、学校飼養動物支援事業等が挙げられる。

新規事業として平成27年度から「いのちの授業」を実施した。本事業は動物の「きもち」や「いのち」についてワークショップ形式で子どもたちが主体的に考えながら、動物を飼養している人間が果たさなければならない責任について学ぶことを目的とした。

授業を受けた教諭や子どもたちからは、動物との接し方や飼い主責任の理解について好意的な反応がみられた。そこで、学年やクラスの状況などが異なる子どもたちに対して、それぞれどのような内容で実施するのがより効果的かを検討したので報告する。

2 実施方法

(1) 実施校数

平成27年度及び平成28年度で本事業を実施した学校を表1に示した。実施校数は述べ18校、内訳は低学年（1，2年）10校、中学年（3，4年）2校、高学年（5，6年）4校、高等学校2校、実施回数は延べ31回で受講した児童・生徒数は772名であった。

表1 「いのちの授業」実施校一覧

平成27年度				平成28年度			
	地方	学校	学年		地方	学校	学年
A	南信	F小学校	2	J	東信	K小学校	4
B	東信	N小学校	6	K	北信	K小学校	2
C	南信	S小学校	1	L	南信	S小学校	1
D	東信	K小学校	5	M	中信	O小学校	2
E	東信	N小学校	2	N	東信	K小学校	6
F	北信	D高校	高1~3	O	中信	T小学校	1
G	東信	S小学校	2	P	北信	D高校	高1~3
H	中信	K小学校	2	Q	東信	K小学校	2
I	北信	G小学校	3~4	R	中信	K小学校	5

(2) 申し込み理由

本事業への申し込み理由を表2に示した。動物飼養経験の有無と、本事業への申し込みのきっかけで分類した。なお、事例NとPはそれぞれDとFと同一クラスのため省くこととした。また、事例Fは高校生のため動物飼養経験の有無を把握できなかったため不明とした。

申し込みのきっかけは、既に動物を飼養しておりその飼い方相談が4件、これから動物飼養を始めたという相談が4件、子どもたち自身が「遺棄動物」について興味をもっておりそれに関係した授業をして欲しいという相談が6件あった。

また、教諭向けに行った学校飼養動物に関する研修会において本事業の存在を知り、申し込んだ事例が2件あった。

低学年は平成23年度に新学習指導要領が実施されたことで動物をすでに飼養している場合が多く、センターに相談するきっかけとしては飼養方法やこれから飼うための助言といった技

術的なサポート、または飼っているがさらに踏み込んだ学習をしたいといった内容で当センターに相談をする事例が10校中8校であった。

反対に、中学年や高学年及び高校では、学校での動物飼養の経験はないが子どもたちが「遺棄動物」等に対して自発的に興味を持っており、それを受けて教諭が申し込む事例が6校中4校であった。飼い方の技術的なサポートというよりは、子どもたちの精神面での成長等に対する期待といえた。

表2 各事例の動物飼養経験の有無と申し込みのきっかけ

		事例			
学校での動物飼養経験	有	A、C、H、L		I	M、O
	無		D、E、J、K	B、G、Q、R	
	不明			F	
申し込みのきっかけ		飼養動物の飼い方相談 ○飼い方は適正か ○子どもたちが自分本位の接し方をしている等	これから動物飼養を始めたい	子どもたちが遺棄動物問題に興味がある	事業の存在を知ったから

(3) 授業内容

授業はワークシートを用い、ワークショップ形式で行った。これは、子どもたち自らが考えたことや感じたことをワークシートに書き込みそれを発言することで、主体的に考え授業への参加を促すためである。

ワークショップで扱う項目は、表3に示した7項目とし、子どもたちの年齢や状況、教諭からの要望などから組み合わせを変えて実施した。

表3 ワークショップで扱う7項目

	項目	気づき
①	動物の飼い方について	
②	人間のまわりにはいる動物たち	動物は大きく「ペット、家畜、野生動物」に分かれる。「野生動物」以外は人間が世話をしなくてはならない
③	みんなは「生きて」ますか?	動物も人間と同じで「生きて」いる
④	児童と動物の心音聴取	人間も動物も心臓が動いている
⑤	この動物はどんな生きもち?	動物にも人間と同じように感情や要求があり、それは人間の世話の仕方によって左右される
⑥	動物に対する飼い主の責任	飼われている動物は、人間が世話をしないと生きられない。(世話をする責任)
⑦	動物愛護センター及び保健所の仕事内容と長野県の動物関連の数値	動物愛護センターや保健所の仕事内容を正しく理解し、動物が遺棄される原因と自分たちは何ができるのかを考える

3 結果

各事例で実施した授業内容と各項目の子どもたちの様子を◎、○、△に分類して評価し、表4に示した。評価基準は、質問に対して子どもたちがどの程度反応したかで分類し、◎ほぼ全員が反応、○半数程度が反応、△一部だけが反応、とした。

本事業で学んでほしいことは項目⑥の「動物に対する人間の責任」であるため、全校で実施した。この話をした際の子どもたちの様子で◎または○が付いている事例は低学年ではA、H、K、M、Oの5校であった。5校に共通したことは、項目⑥を話す前に項目③から⑤までをすべて行っていたことであった。一方、項目⑥に△が付いている事例C、E、G、L、Qの4校では、教諭からの求めに応じて動物の飼い方という技術的な話に重点を置いたか、項目③から⑤のいずれかを実施しなかったことによる可能性があった。

中学年以上では、項目の組み合わせに左右されることなく項目⑥を話した際の子どもたちは概ね集中していた。高学年の事例Dは授業後に動物の飼養を開始したが、項目⑥の「飼い主の責任」をよく理解し飼養にあたったと担任教諭から報告を受けた。

学年を問わず、教諭からは「保健所で飼育放棄される犬や猫をたくさん見てきた行政の獣医師だからこそ、『飼い主の責任』という言葉に重みがある」といった手紙を、子どもたちからは「動物のきもちを考えてお世話をしたい」「責任を持って最期まで世話をしないといけないと思った」といった感想をもらった。

表4 各事例での授業内容と子どもたちの様子

	項目	気づき	低学年										中学年		高学年以上					
			A	C	E	G	H	K	L	M	O	Q	I	J	B	D	F	R		
①	動物の飼い方について			○							○									
②	人間のまわりにいる動物たち	動物は大きく「ペット、家畜、野生動物」に分かれる。「野生動物」以外は人間が世話をしなければならない								○		○	○			○				○
③	みんなは「生きて」ますか?	動物も人間と同じで「生きて」いる	◎					◎	◎			◎	◎		◎				◎	
④	児童と動物の心音聴取	人間も動物も心臓が動いている	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎						◎
⑤	この動物はどんなきもち?	動物にも人間と同じように感情や要求があり、それは人間の世話の仕方左右される	○	△				◎	○	△	○	◎			○	○	◎		○	
⑥	動物に対する飼い主の責任	飼われている動物は、人間が世話をしないと生きられない。(世話をする責任)	◎	△	△	○	◎	○	△	○	○	△		○	◎	◎	◎	◎	◎	◎
⑦	動物愛護センター及び保健所の仕事内容と長野県の動物関連の数値	動物愛護センターや保健所の仕事内容を正しく理解し、動物が遺棄される原因と自分たちに何ができるのかを考える													△	○			◎	○

◎：ほぼ全員が反応 ○：半数程度が反応 △：一部だけが反応

4 考察

今回の結果から、項目⑥を理解するために必要な授業内容を学年別に検討した。

(1) 低学年：事例A、C、E、G、H、K、L、M、O、Q

子どもたちの集中力は短く、また理解力やすでに持っている知識量が他の学年と比べ少ないと考えられる。よって、この学年では一つの話題にじっくり時間をとることはせず、項目③から⑥までをすべて行うのが良いと判断した。項目①のような技術的な話を教諭から希望された場合は、学校飼養動物支援事業として別に実施することが必要と考える。

また、動物を飼養している事例は項目⑤の動物のきもちを考える際、積極的発言が多かった。動物を飼養していない子どもたちにも、積極的に動物のきもちを考える質問を用意することが必要と感じた。

項目④の心音聴取のような実験的要素のあるものはどの事例においても子どもたちの反応が良い。自分と動物の心音を聴き比べることで項目③をより実感しやすいと考えられるので、項目③と④はセットで実施する方が良いと考える。

(2) 中学年：事例I、J

子どもの授業中の様子は非常に意欲的であった。項目数は2または5と極端であるが、いずれの場合も集中力が切れることなく充実した授業であったことから、項目数は多くてもよいと考える。また、興味がある子どもが対象であれば、項目⑦のような現実起こっている問題に対してもきちんと向き合う力があると考ええる。

(3) 高学年以上：事例B、D、F、R

遺棄動物の問題等に関心が高い子どもや自ら学ぼうとする意欲のある子どもが多い。こちらの話を理解する力もついており、項目数は少なくとも集中力が切れることなく授業に対して終始非常に意欲的であった。ワークショップ形式で「動物にも人間同様感情や要求がある」ことを分かってもらいながら、遺棄動物の問題など、ひとつのテーマを詳しく話すことで、動物の適正飼養とはどういうことか、を正しく理解できると考える。

5 まとめ

本授業は「動物を飼う際、人間には責任がある」ことを子どもたちに知ってもらうことが目的の一つであるが、けして「命はこういうものだ」「こうしなさい」などと教えたりはせず、子どもたちに主体的に考えてもらうことに重きを置いている。授業を受けた教諭から「子どもたちが動物のきもちを考えて世話をするようになった」「生き物を飼うということに責任が伴うことを実感したようだ」といった好意的な声をいただくことも多いのは、子どもたち自身で多くの事に「きづく」からであろう。

また、子どもたちの様子や言葉から、子どもたちの中にはもともと優しさの芽があり、本事業で「動物のきもち」を考え「人間の責任」を知ることで、子どもたち自身でその芽を育てられるのだと実感した。そして、実際に飼い主から放棄された動物たちと接する行政の獣医師だからこそ、そのきっかけを提供することができるのだと改めて感じた。

今回の検討を元に、子どもたちに対して最適な内容で「いのちの授業」を実施することで、子どもたちが他者の気持ちを思いやり飼養動物に対して責任を果たすことができる大人になってもらうことを願いつつ事業の推進に努めたい。